

連載

挑戦

～県農業試験場のプロジェクトX～②



「栃木芳香1号」「栃木芳香2号」

連作障害による生産性の低下、さらに那須大水害に襲われ、県内一のうどん生産地・大田原市をはじめとする那須地域のうどん栽培は大打撃を受けた。このままでは本県特産のうどん栽培はダメになってしまう。県農業試験場にうどん新品種開発プロジェクトがスタート、9年間の努力が稔って初の県産ブランド「栃木芳香1号」「栃木芳香2号」が誕生した。市場評価も高く、大消費地の首都圏を席卷する本格的な出荷の時を待っている。

清々しく香り立つ新品種うどん

昭和五十五年、減反政策に伴って 大田原市でうどんの栽培が開始された。栽培面積は右肩上がりに拡大し、昭和六十一年には県内一の産地となった。東北地域のうどんは栃木県の特産として首都圏市場で大きなシェアを占めてきた。しかし、栽培面積が増加していく一方で連作による障害

が問題になっていった。連作障害は、作物を同一圃場で継続して栽培すると生育が停滞し、生産性が低下する現象のことで、うどんでもその現象が

この目標を目指して全国でも稀なうどんの育種を開始、平成十五年、

行ってようやく種子を得ることができた。

有望二系統の選抜

その後、交雑個体選抜や系統選抜を行った。平成十九年に特性検定試験が行われ、軟化茎が白く年内収量が多い二系統を選抜して「栃木1号」、「栃木2号」の系統名を付けた。

とを実証した。現地からは収量性が高く、商品価値も高い、と思った以上の評価を得た。平成二十二年二月と十二月に京浜市場の各社に新系統の外観と食味を評価してもらった。市場関係者から「紫」より「曲がりがない」、「軟化茎が白い」など高い品質評価を得た。

この間、うどん生産者を集めた検討会などを実施しながら、選抜した二系統を現地へ出すことに決めた。平成二十年から育種は県農業試験場本場で行うことになった。有望な二系統について試験を行うとともに現地試験用種株の増殖を行った。そして、現地適応性検定試験実施のため、那須と塩谷の産地に種株を配布した。うどんは種株一株から四〜五つの種株しかとれないため非常に増殖率が低く大変だった。

平成二十三年春からJAなすのとJAしおのやの各生産組織による増殖が始まった。そして、平成二十五年春に栽培希望者全員に種株が配布された。また、同年春JAかみつが、JAおやまの生産者にも種株が配布され現在増殖中である。その後も県内産地から栽培希望の声があがっており、評判は上々だ。全国有数のうどん産地復活へ大きな期待を担っている。



期待を担う初の県産ブランド

「群馬在来系統(母)」と「改良伊勢(父)」を交配した。当初、露地で交配を行ったが、交配のタイミングが分からず、種子を得ることができなかった。試行錯誤を繰り返しながら、ハウス内での交配や蜂による交配を

「栃木2号」は緑化栽培に適するこ

起こっていた。また、うどんの品質評価の一つに「軟化茎が白い」という項目があり、在来の「紫」では、軟化茎に「赤線」が発生しやすかった。このため産地からは「赤線」の発生が少なく、より品質の高い新たな品種を望む声が高まっていた。